



SFバカ本

白菜編

大原まり子・岬兄悟 編

大場惑・岡崎弘明・梶尾真治・谷甲川
川みき・野阿梓・森奈津子 著



ジャスト
システム

SF

〈白菜編〉

大原まり子・岬兄悟=編
大場惑・岡崎弘明・梶尾真治・谷甲州・
とり・みき・野阿梓・森奈津子=著

本



ジャスト
システム

S F バカ本 白菜編

1997年2月2日 初版第一刷発行

編者/大原まり子・岬兄悟

著者/大場惑・岡崎弘明・梶尾真治・谷甲州・

とり・みき・野阿梓・森奈津子

発行人/浮川和宣

発行所/株式会社ジャストシステム

本社 〒770-75 徳島県徳島市沖浜東3-46

編集人/中尾勝

出版部 〒107 東京都港区北青山1-2-3 青山ビルヂング

装丁/坂川事務所

印刷製本/中央精版

定価はカバーに表示しています。

本書の無断複写・複製・引用を禁じます。

乱丁、落丁の場合は、送料当社負担にてお取り替えいたします。

©1997 OHARA Mariko, MISAKI Keigo, Printed in Japan

ISBN4-88309-435-9 C0093

S
F
バカ本

白菜編

目次

インデペンデンス・デイ・イン・オオサカ
(愛はなくとも資本主義)

大原まり子

5

百貫天国

大場惑

27

五六億七千万年の二日酔い

谷甲州

55

流転

岬兄悟

83

地獄の出会い

岡崎弘明

115

ネドコ一九九七年

とり・みき

147

地球娘による地球外クッキング

森奈津子

169

政治的にもっとも正しいSFパネル・ディスカッション

野阿梓

205

ノストラダムス病原体

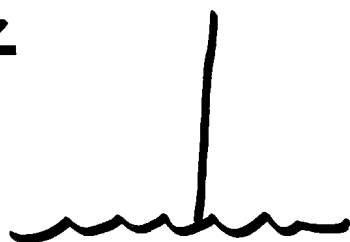
梶尾真治

231

編纂者あとがき——SFのおかしみへ大原まり子・岬兄悟へ

260

大原まり子



インデペンデンス・デイ・イン・オオサカ
(愛はなぐとも資本主義)

大阪は、古く難波なにわと呼ばれたが、室町時代に大坂と称し、明治以降、大阪になった。

その歴史は、仁徳天皇の時代までさかのぼる。難波に高津宮たかつのみやが置かれたのが始まりだが、その記述は『古事記』にも見られる。

大雀命おおささぎのみこと（第十六代仁徳天皇）は都に食事を作る煙が立たないのを見て、三年間、人民の税金や労役を免除した。宮殿に雨漏りがしても器で受けた。やがて民の暮らしは豊かになり、食事を炊く煙が国中に立ちのぼったという。

この優れたみかどの伝承は、

高津の宮の昔より

代々の栄えを重ねきて

民のかまどに立つ煙

にぎわいまさる大阪市

と、大阪市歌にも歌われることになる。

この地が大きく栄えたのは、豊臣秀吉の城下町となってからである。全国の物資がこの地に集まり、各地へ送られる拠点となった。

最も栄えた江戸時代には、“商人は神のごとし”といわれ、大商人の富が大名をも凌ぐほど

であつた。

近世の大坂は、商業だけでなく、文化・文芸も盛んで、井原西鶴、近松門左衛門、上田秋成などの文学者、浄瑠璃作家、国学者を輩出した。また、学問や文学を愛する豪商たちは援助を惜しまず、また自ら町人学者となることも多かった。

*

道頓堀のマンホールというマンホールの蓋が吹っ飛び、ぷしゅーっという白い蒸気と共にドブの臭いがばらまかれた。

そして、地獄で煮え立つ釜から沸き上がるように、声が言った。

『いね〜〜!』

いね、とは大阪弁で、「どこかへいつてしまえ」という意味である。いや、この翻訳は、いささか上品すぎる。「目ざわりだ、とつとと失せろ」とか「くたばれ」とか「地獄へ墮ちろ」とかいう喧嘩用の捨てぜりふであり、要するに「逝つてしまえ」ということだ。

ピンクのシャネルで全身かためた坊城美喜は、そのミニスカが、マンホールから吹き出る蒸気によって、さらに、まくり上げられるのを感じた。

「キャ〜〜ッ!!」

絶叫しながら、ラムスキンにキルティングの施されたシヨルダーバッグ（もちろんシャネル）で、尻を隠す。

そのとき、マンホールからにゅ、う、つとミイラのような手が伸びてきた。一本十五センチはあろうかという指が、彼女のレースつき高級ガーターベルト（ボレロ社製）をひつつかんだ。

「なにすんねん、このどアホ！」

黒革を通した金鎖（シャネルバッグ定番のストラップ）がヒュン、と唸りながら空を切り、ぴしいいつとその手を打ちすえる。

大阪はミナミのクラブ「沙露牝」で働く源氏名ミキちゃんにとって、筋の悪い客の手を払いのけるワザは基本中の基本、たとえ九九が言えなくとも、まずはマスターすべきものである。

幼稚園から市バスで通学していた彼女は、たがのはずれたサラリーマンや酔っぱらいに尻を触られまくっていたので、九九を習うずっと前からワザをマスターする機会に恵まれていた。

憤怒こそが最大の防御なのである。

良心に訴える、礼節を説く、議論する、などの対策はほとんど功を奏さない。

これはイジメに対するときも同じだが、生命のマグマ溜まりからホンモノの感情を汲み上げ、ぶちまける以外に、連中を撃退し理解させるうまい方法はない。

理屈や論理はインテリにしか通じない。

広く通用するのは表現である。

ほんとうは怒っているのに、悲しげなうすら笑いを浮かべていても通じない。本気で怒らなければ、怒っていることが相手にはわからない。わからなければ、これでいいと思うから、ますますつけ込んでくる。

相手も「人間」だと思えば、対等とか平等とか話せばわかるとか、うっかり期待してしまう。しかしながら、相手が「人間」ではない場合もあり得るではないか。

三本指の、鉛色をした巨大な手は、叱られた小犬のようにマンホールの縁まで下がり、じつと様子をうかがった。

そのあずかり知らぬことであつたが、喧噪と悪臭に満ちた大阪の町が広がつていた。けげばけかしいネオンが、濁つた川の水面とビルの肌に照り返つていた。

舞い上がったマンホールの蓋が夕焼けに丸く映えるのを見て、酔っぱらった連中がUFOや見るUFOや〜ッ、と踊りながら大騒ぎしている。

赤と青のアメリカ国旗みたいな服を着たく、いだおれ人形が、首をひねりながら太鼓をたたき眉と口をばたばたさせている。

腹の出た警官が、派出所の中で、常連のアル中と話し込んでいる。ズボンのファスナーを上げる上げないでもめているらしい。

道端に投げ捨てられたビニール袋の口がひらいて、生ゴミがでろりん、と流れ出している。金色の化繊のショールを巻いた老婆が「く」の字のまま移動してきて、のぞき込み、わけのわ

からない基準によって中身を分別しようとしている。

電柱の影には早くもゲロと犬の糞クノ、今のところはそれだけだが、朝方には人糞まで落ちている始末である。

ミキは、大阪人の例にもれず、恐怖心より好奇心を大切にするタイプだった。さらに決断は迅速で、容赦しない。

マンホールに近づき、ハイヒール（これもシャネル）の先でいきなり指（みたいだが、ひょっとすると雲古うんこかもしれないシロモノ）を、むぎゅうううと踏んづけた。

地球侵略の野望にもえるエイリアンは、その瞬間、気が遠くなった。気絶する寸前、絶滅すべき敵であるところの人類（ $\oplus$ ）が、凄絶せいぜつな笑みを浮かべながら、ピンクの爪のはえた手をつまみ、ばしってくるのを見た。

ミキは、下品の海にぼっかり浮かぶ上品の島、A区H町の高層マンションにある自分の部屋にタクシーで戻り、鍵を閉めると、シャネルバッグからそれを取り出した。

店は休むと、携帯電話で連絡を入れた。

マネージャーの古橋は不機嫌そうな声を出したが、人一倍好奇心（というか嗅覚）の強い彼女にとっては、もはや仕事どころではなかった。

ふと気づくと、まな板の上に置いていた。どう見たってナマモノやもんなあ、やっぱし……などつつぶやきながら、クリスチャン・ディオールのネイル・エナメルNo.766を塗った長い爪の

先で、つんつんしてみる。

『アダムズ・ファミリー』に出てくる手首だけの怪物みたいだ。ただし指の数は三本。長さはそれぞれ十五センチ。カリン糖みたいな、いやらしい形。爬虫類みたいな、いやらしい色合い。よく見ると、感覚器(目ん玉みたいなもの)が指の間のシワに埋もれているのが、またいやらしい。中指(?)をそっと持ち上げると、裂け目みたいな口らしきものである。

「んもろく、なんやこれく、たまらんわくく!!」

ミキは、シンドバッドみたいに包丁をふりまわしながら叫んだ。

たとえば、次のようなシーンを思い出してほしい。

膿がたまり、いまにもはじけそうな白ニキビが額にできているのを発見したとき。

ケガしたあとのかさぶたが、なかば剥がれかかって、むず痒いとき。

まわりに人がおらず、なんのスITCHだかわからないスITCHがぼつん、と壁にあるとき。

ある条件にさらされたとき、どうしてもこうしてしまうという、本能に根ざした行動というものが人類にもあるようだ。

その瞬間、生命の危機にハッと目覚めたエイリアンは、三本の指(だか足だか)をカニのようにくねくねさせながら、まな板の上でいやらしく暴れ、ふいに起きあがって、いやらしく走り出した。が、狭い上に服や靴や化粧品や下着やバッグなどが散乱する部屋の中だ、障害物にぶつかっては脳震盪を起こし、ついに壁に激突してひっくり返り、ひくひく痙攣した。

「うっわ、いやらしい!! なにからなにまで、完つ璧に、いやらしい!!」

ミキは、こみ上げる嫌悪と嘔吐をこらえながら、むんずとそれを捕らえると、シャネルのスカートで縛り上げた。まるで茹でられた上海ガニのような状態で、仰向けにひっくり返っていた。

「あんた、さつき、なんかゆうとつたなあ。いね、とかなんとか。ほれほれ、しゃべってみ!」手足の付け根のところにある口のようなものをパクパクさせながら、それが答えた。

『おんどれ、ええかげんにせんかい。わてらは、コワイコワイもんやねんど。どんなにコワイかゆうたらもう、チ○コ縮み上がってアゴがくく、いうくらいコワイやど!』

「下っ品な大阪弁やなあ……」

最初に取り憑いた人間が悪かったのだ。そいつから、この土地の言語をマスターしたのだ。文句を言うならそいつに言ってくれ、と根が気弱なエイリアンは思うのだった。

『こら。ええ加減にせんかい。おっとろしいワシをこんな目にあわせて、タダですむと思うなよ』
「そんなカツコでどうなるちゅうねん。だいたいアンタ何なんや? こわいこわいて、オバケやあるまいし、なんか特技でもあるんか?」

エイリアンは身悶えしながら、自分を縛り付けている物質を分析した。そしてふいに、絹シルクの糸を口から吐き出した。その糸は空中でもとからあったもののように絡み合い、たちまちにして、金鎖の柄の印刷された一枚の絹布を織り上げた。

ミキは仰天して、その布をつかみ、目を凝らした。まちがいなかった。シャネルのスカーフだ。しかも、こいつを縛り上げているのと同じ柄の。ということは？ 目をこすった、まさか、分裂したのか？ どうもそうらしい。いや、正確には、新品が、もう一枚増殖したのだ。

「あんた！ すごいやないの！」

ミキはスカーフを表に返し、裏に返し、真新しいシルクの張りど、鮮やかな印刷を確かめた。
『どうや。ワシの実力、わかったか』

ミキは正しい大阪人として、たちまち理解していた。
これは儲かる。

彼女にとって、どうやったのかではなく、何ができるのかが問題だった。さらに言えば、誰が(どういう実在が)それを成し遂げようとも、偉業(すなわち金になること)であれば、とりたてて興味を持たなかった。つまりは、およそ哲学とか科学する心には無縁の女であった。が、もちろん、それゆえに、生活者として成功していた。このものとの出会いは、彼女にさらなる経済的成功をもたらしそうであった。嗅覚がそう告げていた。

「あんたのことは、生理的に大っ嫌いやけど、それでもつき合ってゆきたいわ。あんたは、どう？」
エイリアンは答えた。

『おんどれ、ようやつとワシの実力がわかったようやな。ワシらかて、おまえらなんか大っ嫌いじゃ。生理的にダメなんや。ほんま、いねくくって感じなんや。ワシらがここへやつてき

たとき、おまえらがうじゃうじゃうじゃ地表を歩いてて、ほんま、氣い失うかと思たわ。必死で吐き氣こらえながら、やっと一匹つかまえて、地球の言葉を習たんや。あああ氣色わる……」

と戦慄したように震えてみせる。

どっちのセリフじゃ、と思ひながら、ミキは今後のことを考え、やさしくたずねた。

「で、あんたはどこからきたの？ 木星？」

『多次元宇宙SFって知ってるか？』

教科書に載っていた、トンネルを抜けるとそこは雪国だった……以降、一冊の小説も読んだことのないミキは、力いっぱい首を横にふる。

エイリアンは人差し指（？）を立てて、ちっちちちと言った。

『時間ちゆうのんは不思議なもんでな。たとえば、もしきようワシとオマエが出会わなんたら、別の世界が進んでたはずやろ？』

ミキはうなづく。たぶん、店に出ていつものように男たちの相手をしていただろう。

『いろんな可能性がそのまんま枝分かれして、たくさん宇宙が同じ空間、時間に重なって存在してるっちゅう理屈が、多次元宇宙説や。つまり、この地球はオマエら人類が他の生物より抜きんでて文明を打ち立てたが、ワシらはワシらの宇宙で、この美しい青い地球に棲み、別の文明を築いてるワケや』